

〔翻
刻〕

筑波大学附属図書館所蔵 西村本『間之本』（B冊 その三）

飯塚 恵理人

B冊の三回目として、「大社」「上掛り道成寺」「禪師曾我」「那須与市」「源氏供養」「高砂」「替簀」「藤戸替」「町積」「岩舟」「養老」「御裳濯」「右近」「諸社」「熱田」「魔無原」「雨月」「錦戸」「大江山」「元服曾我」の二〇曲分を翻刻する。本号で西村本『間之本』の翻刻は完結する。

大社 六〔四〕十九

へかやうに候者ハ、此邊に住居する者にて候、某ハ存る子細のありて毎日大社へ参候、急て参らハやと存る、去程に、当月にハ余の国くくにハ神無月と申が、又此国の大社にハ神有月と申ス、是につき目出度子細の御座あるなど、聞申て候が、我等ハ存す候、則当月神有月にて候間、此次てに神主殿に尋申さハやと存る。へいやひとりことを申うちに参りついて候、あら有難や、目出たう御神楽を参らせうするにて候。へや、神主殿の候か、いや神主殿の御みえなく候、急キ呼出さう、いかに神主殿へ申候、御神楽を参らせたく候間、急キ御出候へ哉。へたれにてわたり候ぞ。へ某にて候。へよう参らせられた、そなた程しんじやハなく候よ。へ某も随分神をとるやうに仕候。へ近比にて候、さやうに候に今、ぜんくになうとくにならせられ、御息達も繁昌にて目出たう候。へ去程に神主殿に申度事の候。

へ何事にて候そ。へ承候へハ、余の国々にハ当月を神無月と申、又当国大社にハ神有月と申、此子細を語て御きかせ候へ。へ不審尤にて候、大形いわれを語て聞せ申さう、惣してさやうの事も大社につきての子細にて候、その故ハ、日本六十六ヶ国の神々当月ハ此大社へ集り給ひ、是にて弥天下おだやかに目出たう守り給へと念比に仰あハされ候へて、又人間の男女夫婦の間の縁の御さためなさる、事にて候、なんほう目出度子細にて候ぞ、余の国々にハ神無月と申に、此大社にハ当月神々の集り給ふに今神月と申、去程に、日本の御神わが社々へ御帰の折ふしハ、此月の末つかたにて候、中にも天竺より御影向の御神、是ハはやともの明神と申候、先^又あのむかひにみえたる大山ハ、かミあげの山と申、あの山へハやともの明神御あかりあつて、神かみに御帰りあれとて榊の枝を持て他方へ返し給ふ、是につき目出度神秘あると申候へ共、神慮の事ハ委ハ申さぬ事にて候、大形ハかくのことくにて候よ。へ弥ありかたき御事にて候、又いつものことく御神楽を参らせて給り候へ。へ心得申て候。へいかにいちとのへ申候、御神楽を参らせよと御申候。御子へ中くの事、急キ御神楽を参らせられ候へ。へ心得申候。へはるか成沖にも石のあるものを。ゑひす^のこぜんの腰かけの石、ふゑ^{一段目}ありかぐら。お神楽こそ目出たうおりやらしませ、命^誅なかう、ちうやうのぞいてまもらせ給へ、ますか^{ヒヒヒヒ}、み。笛有テ、後ハしやきり、神主うつて、神子ハはいる。因幡のことく、後ハ神主しまふ、神主とひやうし、あたり拍子也。

上掛り道成寺 七【五】拾

ワキ、名乗テ呼出ス、鐘をしゆらうにあげて有かといふ、鐘をさきにつつてをくなり。へさん候、ハや鐘をしゆらうへあげて候、ワキ、女人ハ入候なといふ、畏て候といふて、常の通ふれて、太夫、次第・道行過テ、ひだかの寺に着にけりくといふ時に出あふやうにする。へのふく、供養のにわへ女人禁制と仰出されて候程に、急キ御帰候へ、太夫シカく。へけにも是は常の女人にハかハリ候間、それに御待候へ、窺申さう、三井寺のごとくワキツレ呼立言。へ女人禁制と仰候程にその通申て候が、此国のかたはらにすむ白拍子にてある、供養をおかませてくれよと申候が、何とおじやらうぞ、無用と言。へいやおもしろう舞をまふてみせうといふがのふ。

へあらにかくしや、それならハなるまひよ、さりながら苦しからぬ事。へいかに申ス、中く女人ハかなハぬやうに仰候へ共、舞をまふて御みせあらハ、某が心得を以おかませ申さうする間、おもしろうまふて御みせ候へや、後常のことく。

禪師曾我 七【五】拾巻

△いかにたれがある。へ御前に候。△護摩の壇をかさり候へ。へ畏て候。かざる。

那須与市 七【五】十二

始所望する時ハ常ノせりふにて、古キ人のしかたにてかたられ候間、我等もしかたにて語て聞せ申さうするにて候、又問のうちにござゆる事あり、ワキ、暫迎の事に那須与市扇を射たる所、語て御聞せ候へ。

へ是ハ弥おもひもよらぬ事をお尋候物哉、那須与一が扇を射たるも此浦にての事にて御座ありたると申が、しかとハ存す候、去ながら存せぬと申も如何なれハ、古キ人のしかたにてかたられ候をみ申て候間、我等もしかたにて語て聞せ申さうするにて候。へ先八嶋の合戦、今日は日暮ぬ、あすのいくさとさだめ、引しりぞく處に、沖より尋常にかざつたる小舟に、十七八のけいせい、桜の五つかさねに、くれないのちしほの袴ふみふくみ、みなくれないの扇のひ出したるを舟のせがいにはさんでさしあげ、くがへむひてぞこがせける、いそぎわちかくなりしかハ、舟をよこにひかへ、是あそばせとぞまねきける、判官後藤兵衛さねもとをめし、あれハいかにと御誂ある、さん候、射との事にてもや候らん、定て大將ぐん矢おもてにたち、けいせいを御覧せん所を、てたれねらふて射おとし申さうするとはかり事にてもや候覧と申上る、判官、扱味方にいつつべき者やあると御誂ある、さん候御みかたにきかうる射手数多候中にも、下野の国の住人那須太郎すけたかゞ子に、与市むねたかとして小兵にハ候へ共、手上手にてかけ鳥などを仕るに三つに式つハ必射候と申せば、左有ハその与市をめせとてめされしに、その時与市廿才はかりのおのこ成に、かち

んにあかぢのひた、れを着、甲をぬいでたかひもにかけ、判官の御前に畏ル、判官与市とハかれが事か、あのけいせい
いのたてたる扇の真中射て平家に見物させい、いかに与市、ゑい、さん候、未かやうのぶんの物仕りたる事候ハず、
一じやう仕らんずる輩に仰付らるべうもや候覽と申せば、判官大キにいかつて、今度鎌倉をたつて此陣に供したらん
する侍、義経がめいをそむくべからず、それに子細存せぬ輩ハ急キ本国へ御帰候へ、後日に鎌倉にてさたすべしとい
かり給ふ、与市ぢし申さハあしかりなんとおもひけん、仕らんする事ふじやうにハ候へ共、仕てこそみ候ハねと、判
官の御前を罷立、その比那須のこぐろとてきかうる名馬に、まるばやすつたるきんふくりんのくらをかせ、わが身か
るげにゆらりととり、磯へむひてぞあゆませける、御前の人々、此わか者こそ一しやう仕らんする者と存候と申せハ、
判官もたのもしげにてみ給ふ、かくて矢ごろ少とをかりけれハ、海へざつとうち入、馬のふとばらひたつ程にぞみへ
にける、比ハ三月十八日、酉ノ一天の事成に、折ふし北風はげしく、吹舟ハちいさし、波ハたかし、うきぬしづみぬ
みえけれハ、扇もさだかならず、与市目をふさぎ、南無きみよう八まん、那須ハゆぜん大明神、只今の扇の真中射さ
せてたべ、もし射そんずる物ならハ、弓きりおつて海に入、此ま、自害し、ふた、び本国に帰るべからず、今一度本
国へむかへんとおほしめさハ、此矢はづさせ給ふなど、目をどんぐり目にひらきみれハ、風も少吹よハリ、扇もいよ
げにそみえにける、与市小兵といふ、ぜう十二そく三つぶせ、よつひてはなつ、あやまたず扇のかなめきわ一寸斗
上をひいふつと射切テ、かぶらは海に入れハ扇ハそらにあがり、春風に一もみ二もみまれ海に入ル、みなくれない
の扇のひ出したるが、白波のうへに、ういつしづんづ、ういつしづんづみえけれハ、只さなから紅葉のちりうきたる
にことならず、平家ハ舟ばたをた、いていたりや与一、いたりや与市とかんずれハ、源氏にはゑびらをた、いて、射
たりやむねたかとかんずる、判官あまりの嬉しさにじゆきやうして、や、あの与市をおくのまへつれてゐて、ち、す
わせい、ち、すわせいとかやうに御説ありたると申ス、先我等の承たるはかくのことくにて候、如何様成子細により

御尋被成候ぞ、不審に存候、二ノ句、常のごとく。

源氏供養 七【五】拾三

ワキ、いかにたれかある。問へ御前に候。ワキ、なんぢハこさかしき者にてある間、紫式部源氏を作り給ひし様鉢を、存る事あらば語てきかせ候へ。へ是ハ存知もよらぬ事を御錠候物哉、源氏の子細なとは上つがたに御沙汰なさる、御事なれハ、法印様の御存知なき事ハ候まし、去ながら御笑草とおほしめし御尋と存候間、承及ひたる通、粗御物語申上ふするにて候。へ総して紫式部と申候ハ、もとハたう式部と申して、一条院のささきしやうとうもんんのうへわらハにてわたらせ給ひ候、其比さいるん今上東門院へ御文ありて、御つれ／＼を御慰みあるへきたためにて候、何にてもおもしろき物語候は、みせてたまはれとの御事にて候、上東門院とう式部をめされ此事を仰候へハ、藤式部申されけるハ、うつほ・たけとり・つれ／＼・いせ・住吉などハめなれ候、その外ふるしき物かたりハ数多候へ共、新しく作りて参らせられよかしと申候へハ、さらハ藤式部につくりて参らせよとの御事にて候、藤式部ハ仰を承り、石山の観世音へ祈誓申されければ、なんほう観世音の御誓ひありかたく候そ、八月十五夜の月の明々たるに、源氏壹部のしゆかう湖水に移りて候を、あれなるだけに登り、大般若のうらをかへし、たゞなにとなく筆にまかす、源氏いちぶと号し、是を上東門院へ参らせられ候へハ、上東門院ハ御覧して、扱もおもしろき物語かなとかんじ給ひ候、中にも第三若紫の巻、心も詞もおよばれずつらね給ふ^ひによつて、ふぢハ紫のゆかりなれハとて、紫式部と名をあらためられ候、夕兒・すゑつむ花・すま・あかし・みをつくしの巻など、申て、いと物あハれ成ル物語の候、又夢のうき橋と申スハ、人間のういてんべんをくハんじ、ひくわらくようのうつりかハるをもつて、あるハなし、なきハあり、又なしとも候、源氏六十てうの子細、色々様々御座ありけに候へ共、上つかたに御沙汰なさる、御事にて、我等こときの者委ハ存せず、唯承及ひたる子細ハかくのことくにて候。へ是ハこさかしき申事に候へ共、最前の女性ハ疑ひもなきむらさき式部の御亡身にて御座あらう

すると推量申て候、石山にて源氏の供養を御のべあれかしと存候、近比にて候。

△高砂 七拾四

へ先当浦におゐて高砂の松と申は、とりわき是成松を申ならハし候、又相生と申子細ハ、古今集のしよに高砂・住の江の松も相生のやうに覚えと印シをかれたると申ス、諸木おほき中に、松ハ常磐木にてさかへ久しき物なれハ、和歌の道さかゆる事も、此高砂住吉の松の葉のことくなるべきとたとへをかれたると申ス、それならず、上代に万葉集をせんじ給ひしを高砂の松と号し、延喜の御代に古今集をせんしらしを住吉の松にたとへ、昔も今も御歌の道さかゆる事ハあいおなしことく成べきと、たとへおかれたると申ス、又当社と住吉とハ夫婦の御神にて御座有と申ス、左有によつて、当社明神住吉へ御影向の御時ハ、御神木の松にて神かたらひをなさるゝと申ス、又住吉明神此所へ御影向の御時も、是成松にて神かたらひを被成、昔より今に至る迄いく久しくあい来り給ふに今、相生の松と申ス、是ハ此所におゐて我等こときの者の申ならハしたる子細にて御座ありけに候、又当社と住吉とハ一躰^分ふん神^身の御神にて、和歌の道さかゆく事も、又男女夫婦の間の末さかへ目出度事も、偏に当社住吉の御神徳なると申ス、和哥の詞にも、いさご重じて岩尾となり、ちりつもつて山となる、濱のまさごハつくる共、よむことは、つきましいなど、かくのことく承りてハ候へ共、真実の相生と申ス事ハ存ぜず候、又朗詠の詩にいはいはく、きうかさんふくのしよ^{九夏三伏}げつ、たけさ^竹くごの風をふくみ、けんとうそせつのかん^半ちやう、松君子のとくをあらハす、又哥に、あまくだるあらひとかみの相生を、おもへハ久し住吉の松と、かやうにもありけに候、尚も松のめてたいと申子細は、一千年の色雪の中にふかしなと、申ス伝も御座候、その子細ハよの諸木ハ冬の季になり候へハ、雪・霜におかされて、色もかわり、葉もおち候へ共、松ハしいし^{四時}とて、雪のうちに^時もあをあをとして常磐なるよわひ久しき物にて、百を十かへり千年になり花咲申ス木なれハ、松にうへこして目出度物はあるましきとて、両神諸共にうへ給ふにより、あいうへの松と申候、猶も奇

特成事の候、高砂の松ハ東へ枝をさし、住吉の松ハ西へ枝をさし申事も、子細あると申ス、わが此所ハ五十六おく七千萬歳迄も守りたまはうするとの御事と承候、扱もろこしの、ごのていこいつし物のほ、○あるをの夢中にねのびの松をふくむとみく^てはいにんし出生したるその子、十八才^{のとし}にしてさんかうなる、にをんかるがゆへに、松をしう八公のゑいとほめられたると申ス、又仁王十一代すいにん天王の御宇に、摂州津守のうらへこんじきの光りさし候程に、勅使をたて、御覽しけれハ、四本の松生出申ス、是則住吉・四所明神共、御神木共、御神鉢共あがめ給ふ、なんほうめてたき御事にて候ぞ、総して最前々申ことく、常ノセリふ。

替籠 七拾五

へ去程に、先梅の名ハわうしゆくばい・かうぶんぼく、扱ハ八重一重白梅紅梅など、いふ、梅数多御座候なかにも、此簾の梅と申子細ハ、此所ハ源平両家のた、かひのちまたにて候、中にも此生田の森ハ大手^ビにて候、平家ハ一谷に十万余騎にて籠り給ふ、又源氏ハ六万余騎を二手にわけ、大手ハのりより大將軍にて押よせたまふ、比ハ二月七日のあけほのに河原兄弟申やう、御陣にて手柄をせんより、生田の森の先がけをして、名をかうたいにのこさんとして、さかもぎこゑて城の内へ入り、武蔵の国の住人、河原太郎・同二郎兄弟なり、いくたの森の先陣ぞや、我とおもはん人あらハおり相給へ、げんざんせんと、大音声にて名乗けれハ、平家の兵是をみて、あますなもらすな射てとれとて、武人なから射おとしけり、梶原是をみて、おのくの無格^{フカ}にて河原兄弟うたせてあり、いさや平家の奴原に手なミのほとをみせんとして、梶原源太父子のせい五百余騎にて一ノ木戸切ておとし、ぶんとり高名さまの御手柄を被成、其時景末何とおほし召候哉覽、此梅の色よきを御覽して、一枝折て簾にさし、その日のかうミやうをきわめ給ふ、景末おほしめし候ハ、今日の高名は此花故なり、八幡大井にてもあるかとて、源太此花にむかひらいをなし御申候間、それハ此梅を簾の梅と申て、今ハハや名木のやうに申ならハし候、総して最前々申ことく、常ノセリふ。

へ扱又頼奉りたる御方の先陣を被成たる様躰ハ、平家ハ讃岐の八嶋にありながら、左馬頭行盛を大将として、式千余艘にて備前の小嶋に着給ふ、三河守則盛も室のとまりに御座ありけるが、此由を聞給ひ、舟合あかり西川尻藤戸の当りに陣をとる、然所に平家の方合扇を上ケて源氏をまねきけれ共、舟なくして叶ねハ、その日ハてきを見なからいたづらに暮す、たのふたる人案シ給ひ計るハ、渡すへき便りのあればこそ招らんとおほしめし、此邊の浦人をかたらひ、むかひの嶋へわたり、瀬はなきかと問たまふ、うら人、中く渡る瀬二つ候、月頭にハ東が瀬になる、是を大根の渡りと申ス、月尻には西が瀬になる、是を藤戸のわたりと申ス、今ハ西こそ瀬にて候へ、その広さ式たん程も御座候、そのうち一所ふかきと申せハ、たのうたる左有は瀬踏をしてみせよと仰せられ、かの者をつれ、案内を能々存知有テ、浅キ筋にみをしるしをたてさせ、御帰り有テ、つくくとおほしめしけるハ、かの者賤キ者なれハ、人にたのまれ語るならハ、ぬしの手柄にハ成まいとおほしめし、人にかたらぬさきに彼者を指殺シ、海にしつめ給ひ、扱明ル廿六日のたつの刻に先陣をあそハし、平家を追落シ給ふ、古合川を渡シたる事ハあれ共、海を馬にてわたしたる例なしとて、頼朝今自筆の御かんじやうを下され、その上に小嶋を御恩賞に給る、かやうの事ハかんかほんでうにためしなし、又只今の女ハ藤戸のわたりををしへたる者の母にて候程に、悔ミを申したるハ尤断りにて候、我等こときの者の分別にハ各別違ひたる事にて候、左様に候へハこそ人に勝れたまひて候、後ハいつものことく。

町積 七拾七

へ是ハ、和州春日の明神に仕へ申末社の神にて候、去程に、唯今これへ出る事余の義にあらず、梅の尾の明恵上人、入唐渡天有へしと思しめし、御暇乞のために、当社へ御参詣被成候を、秀行を以テ御とめ被成候、その子細ハ、明恵上人とかさぎのげだつ上人、此兩人をば、明神両の御眼、左右の御手のことくに思しめすに合、へんしもはなれ御

申シ有へき事を如何とおほしめす程、御内證に有り、その中にも、明恵上人ハ御心正直にして、慈悲まします御方な
れハ、直に御詞をかハしたまへる、すでに当社へ社參の御時も、なら坂迄御迎に御出被成候へハ、寔に心なき草木迄
も枝をたれ、ちくるい鳥類に至る迄、ひざをおり葉をたれ、拝シ申程の貴キ御方なり、明恵御座なくてハ、明神如何
とおほし召、色々止め給へ共、只壹筋にたつへしとて、あるしやうぎやうを御覽づれハ、たいたうちやうあんの都と
天竺まかだ国、わうしやじやう迄ハ五万里と、うんめんのことは〔付箋：うんぬん、余の事ハさしおいて〕さしのけ
て、先此沙汰経説なり、暫しやうぎやうのせつもなきについて、是を御覽づれハ、千三百三十四里と、廿四町なり、
小里の百里二日になをせハ、一日に百里余りにあたりたるへし、小里の千里廿日、小里の万里二百日にかそふれハ、
五万一千日のちやうなり、耄年の日数、凡三百六十日になれハ、正月朔日にちやうあんの京を出テ、だい三年と、七
日にハ、いんどの佛生国に至りつくへし、され共、嶮難さがしき道なれハ、さやうにハなるましい、もし一日に七里
あゆみゆかハ、だい四年二月七日にハ、わうしやじやうに至りつくへし、かそふれハ、一千一百六拾日の町なり、又
一日に五里あゆみゆかハ、だい五年む月十日にハ、いんどの佛生国に、至りつくへし、かそふれハ、壹千六百三十日
の町なり、是ハおびた、しきりくぎなりとて、又海路を尋テ御覽すれハ、十一萬里の日だうと常にハみへたり、それ
も風波・難風もおそろしきりくぎも、さんがくけんきよにして、あつきどくちうさりかたし、され共、古のげんぢや
う三蔵のこことくあらまほしくおほしめし、いんどの佛生国の、れんぼのおもひに、しのびかたき心を、ゆるさんがた
め、うちにハ、さんみつがしの、ほうべんをもつて、かん極しゆぎやうの、くわんもふを祈ル、外にハ三千のきやう
ろんをかんちく^{しゆ}に心をつくし、ぶつせきをおかまんとの念願、大明神その心さしを哀とおほしめし、ぶつざいせの時
ならばこそ、渡天ありても其身あきもあるべけれ、とてんなしといふ共、天だいハひあい山、こだい山ハ吉野・つく
ば、則かのお山こそりやうじゆせんなれ、山ハどうざるかたちを現シ、さ〔き〕にハへいあんのちまたをみせ、人間

長久、神道あがめ奉ルこゑみてり、仁王四十八代、じやうとく天わう、じんごけいうん式年十一月九日に、此御山にみやい給へる、今に至る迄、れいげんあらたなる御神なり、かほと御神のとゞめ給ふ事、偏に上人の御手柄にてましまさずや、上人とてん御と、まりあるにおゐてハ、大明神ぜんぎやうほうべんを以テ、今夜一夜のうちに三笠山に御天竺を移シ、まやのたんじやう、がやの【浄土】^{成道}、じゅほうのせつほう、さうりんのにうめつ、靈山浄土のじやうだんの躰、五百人の御弟子・千人のけんぞく、しよてんげんじ、ちやうしゆの数く迄、佛在世の様躰おかませ申さうするとして、秀行をもつてとゞめたまふ、やうく御天竺移る哉覽、せんか^{一川一河}も大地もしんだう仕る、かやうの有難キ御事を、心をすまして御おかみ被成候へ、その分意得候へく。

△岩舟 七十八

末社ハナシ、金春二ハ末社有ト云、聞ナシ、

ワキ、一条院ノシンカ、中人、あらしト共ニウセニケリ。

へ此所の者のお尋ハ、如何様成御用にて候そ。へ心得申候。へ当浦の者、御前に候。へさん候、此住吉におゐて、中にも津守の浦成ハ津守の浦と申由承候、其子細ハ、先当社住吉明神の目出度子細と申ハ、仁王拾壹代垂仁天皇の御宇と哉覽に、此津守の浦に金色の光指候程に、不審におほしめされ勅使を立られ御覽候へハ、一夜の中に四本の松生出ル、自^{ワツカ}それを御神木共御神躰共崇申候、総而松ハ、色終古^{トワナヘ}にして千年万年のよハひをたまち、霜雪の中にも色のかわる事なくとしなへにして目出度物なれハ、松にうへこしてあるましきと、当社と高砂の明神とハ、一入御賞翫なされ、御神木にあかめ給ふ、それにつき当浦猶々目出度御瑞相^{スイ}の御座有と承候へハ、下界の龍神、天のさくめかいにて切つたる舟にこまもろこしの数の宝物を君に捧^{ツンデ此ウラニツケ}ケ申さうするとして、舟の用意あると申ス、かやうの事も近比目出度御事にて候、総して岩^{イシ}と申物ハ、少成石にても水に入候へハしづむ物にて御座有が、なんほう奇特成事にて候そ、

その岩ハ海上を自由自在にはしると申ス、其上水の面の事ハ申に及ハす、ある時ハこくうをもとび申など、承及びて候、左様の時ハ天鳥舟共申けに候、去なからかやうの事ハ寔しからぬ事にて御座あれ共、下々に取さた致事は必相申事なり、総して此浦におき目出度子細色々御座あるよし聞及てハ候へ共、最初も申ことく念比にハ存も致す候、先聞及ひたるハかくのことくにて候。へ是ハ不思議成事を御錠候物哉、扱ハ此うらに宝の市を御たて被成、駒唐土の数の宝物を買とらせんがため、是迄御下向の事なれハ天のさくめかい假に顕れ出、宝寄などを捧ケ、きとくをみられたると推量仕候、寔にこさかしき申事にて候へ共、暫御逗留候へて、かさねて寔の龍神の姿をあらハし申事も御座あるべく候程に、今少御逗留有、龍神の姿岩舟をも御覧あれかしと存候。へ近比目出度候。へ御逗留の中ハ、重て御見舞申上するにて候。へ心得申候。

△養老 七十九

へもとすの郡の者とお尋ハ、如何様成御用にて候そ。へ畏候。へ此所の者御前に候。へ何と承候そ、雄略天皇に仕へ御申被成候臣下殿にて御座有が、始て此所へ御下向被成、此所におゐて養老の瀧の子細存知たらハ物語申上よとの御事にて候か。へ我等も此所に住居仕候へ共、左様の御事ハ存せず候、去なから此所の者と召出され所の事を御尋有に、何をも存せぬと申も如何にて候間、片端聞及ひたる通物語申上するにて候。へ先此所におゐて養老の瀧と申て目出度葉の水御座候、其子細ハ古此所に老たる親を持たる若者の候へしが、かの者一段と親孝行成者にて、明暮山路に分入薪を取、親を養育仕候處に、ある時山路のつかれにや、薪をば此所に下に置、此瀧坪にさがつて水をむすんでたべ申候へハ、その水の味感に絶て若ク成心地仕候間、もとゝおやかうくの者にて候へハ、薪をハ此所にをき、水を結んで我か家に取て帰、かの老人にたべさせく仕候へは、その水を給て後にハ栄花の声聞へ、次第くにわかく成心地仕候と申て、ひた給にたぶる程に、真盛の若キ男となりて候。親を養ひたてたるによつて、養老の瀧と名付申さ

れ候、あたりの人々此よしをき、我もくゝと此水をたべ候間、貧成者ハ有徳になり、老たる者ハ若クなり、寔に葉の水にて御座候、先養老の子細○兼ハかくのこづくにて候が、只今ハ何のため御尋被成候ぞ。へ是ハきとく成事を仰られ候物哉、扱ハ某の推量にハ、此所へ御下向の御事なれハ、此山の山神午王御納受あり、古の親子の民と御身を現し顯給ひ、養老の瀧の子細念比に御語被成たると推量仕候、左様にも御座候ハ、暫此所に御逗留被成、重て山神午王の寔の姿を御覽して、其後御心靜に御上洛有て御奏聞あれかしと存候。へ近比有難候、御用の事候は、かさねて承らうするにて候。へ心得申候。

△御裳下 八十

ワキ、当今ノシンカ、中人、アトシラナミニナリニケリ。

へ此所の者とお尋ハ、如何様成御用にて候ぞ。へ畏て候。へ何事を御尋被成度候ぞ。へ当今に仕へ御申ある臣下殿にて御座候が、始て此所御一見の御事なれハ、御衣衣下河の子細、又是成御田ハ水口に五十串立、又五重の御手藏ミを立て渴仰カッの気色御不審におほしめし候間、委かたれと承候か。へ是ハおもひもよらぬ事御誕被成候物哉、我等も此所にハ住む仕候得共、左様の御事委ハ存せず候、去なからは迄召出され御尋候に、存せぬと申も如何にて候間、聞及ひたる通申上するにて候。へ去程に仁王拾一代垂仁天皇の皇女倭姫ヤマトヒメの命、忝御神鏡ミタマシヅメを戴、国々を御廻りありしに、当国あの二見のうらふ比川地に着て上り給ひしに、その時は成御田ツを通して、老翁の御座候、それハ田作テンの翁と申奉ル、此国が神の御鎮座可被成所やありと御尋候へハ、田作テンの翁こたへていふやうハ、さん候はカミ上カミに三十八万歳が間、下津岩根をしきて待申者あり、御道しるべ申さうするとて御案内者被成、此河地について上あうて給ひ、下津岩根を敷て参らせられ候、その時の翁ハ今のおぎだまの神にて御座候由承及て候、又猿田彦の尊共申、去程に御衣衣下河と申子細ハ、二見の浦々河地に着て上り給ひし折節、神のめされたるもすそこれたるを、此河にてす、かれたるに仍テ、御衣衣下河

と申ならハし候、中にも是成瀬を渡らせられたるによつて、神が瀬と是を申候、又御通りありたる山を神路山と申、総して此御田^ウを渴仰^{カフガウ}申御事ハ、太神宮へ上る御くうの御田^ウにて御座有に今、田水は泰成^{ユタカ}レ共御衣^表下河^裏の神水を任入^{マカセ}、神徳長久の恵^{メケミ}を受政^{ウクルマツリ}にて御座候、南方目出度事にて候そ、かやうの事を古人の歌に、山野邊^{ヤマノヘ}のみひをみかへり神かぜの、伊勢のおとめらあいみつる哉、とか様に御座候も、此倭^{ヤマト}姫の古を讀給ひたると承及びて候、総して神秘様々御座有と聞及びて候へ共、それハ上^{うへ}つ方に御さたある事なれハ、我等こときの者の存ル事にてハなく候間、委ハ存せず候、去ながら御尋にて御座ある間、大形我等の承たる通申上て候が、如何様成子細に今御尋被成候そ、不審に存候。へ是ハ不思議成事を御誂候物哉、総して此当にさやうの者ハ御座なく候が、扱ハ某の推量にハ、疑所もなきおきたまの神にて御座あらうすると存候、かやうの事も是迄の御下向一入嬉敷思し召、御姿をまみへ給ひ、目出度^{シサイ}御物語ありたると推量仕候、小賢^{コサカシキ}申事にて候へ共、暫此所に御逗留あり、信心私なく御祈念被成、かさねて奇特を御拝ミあり、心静に御上洛あれかしと存候。へ近比有難候。和銅五年壬子夏四月遣^{ワドウ}長田王子、伊勢ノ齋宮^{イセノサキミ}時山^{トキヤマ}辺御井^{ミヅノイデ}作歌

右近 八十一

へかやうに候者ハ、都北野桜馬場の明神に仕へ申社人にて候、去間此所におゐて、右近の馬場・左近のは、と申て御座候、毎年右近馬場の桜色うつくしく咲乱れ、寔に心にも詞にも及ぬ程見事成御事なれハ、春にもなり候へハ洛中洛外上下萬民花見に参貴^{サキ}賤群集をなし申ス、然ハ只今承候へハ、鹿嶋の神職^{シノヨク}、築波^{キゼ}のなかしと申御方、右近の馬場の花の様林間及びて、桜馬場の明神にも参御覧有へきたために、御出聆^{シノ}跽^{シノ}て御座有由承候間、罷出て御目にか、り申さハやと存て是迄出て候、とこもとに御座あるぞ。へいや是におりやるよ、頓て御目にか、らう。へ御礼申候、是ハ都桜馬場の明神に仕へ申社人にて候、稀人の御出の由承、御目にか、らんため参て候、何と承候ぞ、桜ばゝの明神の子細存知たらハ語申せと仰候か。へ是ハおもひもよらぬ事を御尋にて候、吾等も社人にて候へ共、若輩者の事なれハ委

ハ存せず候、去ながら御尋にて候間吾等の承たる通物語申さう。へ去程に此所におゐて右近のは、と申ハ、則此馬場を申候。又桜馬場の明神と申ハ、天下に隠もなき御神にて御座候、其子細ハ此神を伊勢太神宮にてハ桜の明神と崇申候、又当社にてハ桜馬場の明神と申、いつれも同シ御事なれ共、桜馬場の一字にて天下を守給ひ、王城の鎮守なれハ、余の国々在々所々に靈神数多地をしめて御座有とハ申せ共、取分桜は、の明神ハ靈現新成御神にて、何事も祈をかけ申程の事、諸願成就致寔に目出度御事なれハ、吾もく^くと信仰致、参下向の人夥敷御事にて御座候、又当社におゐて加折ノ日と申事も御座候、五月三日の四日五日六日迄、右左をあらそふ事の候、それハ隨身のことく出立テ、衣裳に付物か作り花かなにぞ致ひて馬に乗、かなたこなたへ蒐出シ、それに付物をとらう、とられまいとする事にてありけに候、さやうの事を見物のために、皆々御出候、仁王五拾四代仁明天皇の御宇に、業平なども御見物被成、女車の立たるを御覽して御歌をよまれたる事も御座あるなど、申伝候、総して最前も申如ク、念比にハ存せず候、我等の承たるハかくのことくにて候。へ是ハきとく成事を御諛被成候物哉、総して此当にさやうの人ハ御座なく候が、その車にのり給ひたる女性ハ、うたかう所もなき桜馬場の明神にて御座あらうすると推量申て候、それをいかにと申に、遠国台御上洛の御事なれハ、たれ有テ罷出此所の様申さうする者もあるましきと思し召、かりにまみえ御詞をかハし御申被成たると存候、小賢申事にて御座候へ共、暫御逗留有、信心私なく御祈念被成重て、神姿を御拝あれかしと存候。へそれハ近比有難候。

諸社 八十二 セリふ常ノ如

へ去程に当山ハ、播州諸社の山と申、その子細ハ、我朝の始天神七代の尊伊弉伊弉冊尊^{ニシ}の御子に、日神・月神・ひるこ・素盞^{スサノ}の尊、中にもそさのおの尊と申て御座候が、惡神にて御入候、地神第一に天照太神そなハリ給ひ候へハ、御代をひるかへさんため、大和の国うだの郡に城郭^{ウラツ}をかまへ、一千の釵をそろへてたて籠り給ひしを、天照太神則け

やふり給ひ候に、千の釵をやふると書て千磐破せんぱくと読せ給ひたる御事も、此時分始りタルと承及びて候、然ハそこの尊は出雲の国に御下向候が、先当山に御座候てみかりをめされ候とて、滄海そうかいまんくゝとたたへ、うしろにハかうがん岑を重、山高シテてしやうや菩提ぼだいを顯し、谷涼やうしてハ下化衆生の理をみ、補陀ぶた樂山の有様も、かくやと盈み有らん末世むひれいらいにてあらうすると營給ひ候に、則尊の名をかたとり頓て諸社の山と申、総テ此山ハ補陀樂山の北、遠行の峯通つテ此所かくのこくとく有由申ス、殊更是成桜ハ御本尊と一舂婦神の桜にて御座候由承候、それ分天人一日に三度づ、天下りたまひ、香花をそなへ供養札押をなし給ひ候と申伝候、去程に春にもなり候へハ、近邊の人々ハ当山の桜をと申され皆々御あかめ有て桜を拝シ奉候、其外種々様々の子細御座ありけに候へ共念比にハ存せず候、先我等の承たるハ如斯にて候。

熱田 八十三

へ是ハ尾州熱田の大明神に仕へ申末社の神にて候、寔に珍しからぬ御事なれ共、当社熱田の明神と申ハ、靈現新成御事なれハ、日本第一の御神と名付て、猶々都をふかく守り度おほしめし、五月三日分八月八日迄ハ御社を出させられ、西の門に御座あるに仍テ、西門の額を鎮光門ちんこうもんとうたれ候、又南の門を海草門と申てかくの御座ありたるに、その比ハ南の門の前迄塩揚タルニ、弘法大師御覽して額の上に海の字を御なをし有テ、字の作りを上○篇にをき森もみを下にをかれ候へハ、それ分塩が二十余丈引申て候、今にかくのことなり、又東の門を春扣門と申子細ハ、唐の玄宗皇帝、楊貴妃の魂魄のありかを尋、方士ト申仙人を御かたひあり、当社迄尋来り、東の門を扣テ楊貴妃に二度相奉候、折節春にてありし程に、春扣門なれハとて春扣門と申なり、扱当社におゐて八つの釵の宮と申ハ、神世の時、そこの尊出雲の国にて蛇を殺シ、尾の中にありし釵を取て、村雲の釵と号、天照太神ハ参らせられたりしに、其後仁王第三の皇子日本の尊○尊多乎すを征罰に御下向の時、天照太神分かの釵を尊に給り、駿河の国蒲原にて、夷ヒ拾万余騎、甲をそ

ろへ野の草に火をかけ、四方の圍^{カマエ}を成^セシ責^セけるに、尊かの釵^{カサギ}にてあたりの草を薙^{ナギ}拂^ハひ給へハ、猛火ハ帰てゑひすの方に萌^{モウ}れかゝり、十万騎ハ時の間にめつし、易^{カサギ}とゑひすをほろほし御帰の時、去子細有テその釵^{カサギ}を此所におさめ給ふ、左有に仍て、昔ハその御釵^{カサギ}を村雲の御釵^{カサギ}と申奉しが、ゑひすを御退治の時、草をなぎ国を納めたまふに、草薙の釵^{カサギ}と御申候なり、去程に出雲の国にて御退治被成たる大蛇、草薙に執心をなし申候間、同シ寸に釵^{カサギ}を七つうたせ、かのを上所に籠置、八つの釵^{カサギ}の宮共、又八釵^{カサギ}の明神共あかめ奉ルナリ、先是ハ当社におゐての子細、只今当社へ稀人の御出にて候間、罷出て御目にかゝり、なににても一曲仕なくさめ申さハやと存て是迄出て候が、稀人ハ何所に御座有ぞ、されハこそ是に御座候よ、急て御礼申さう。へ是ハ当社明神に仕へ申末社の神にて候、只今の御参詣近比目出たう存る、最前当社明神嬉敷思^シめし、かりに姿をまミへ、重テきとくを拜ませ御申あらうするとの御事にて候、其間御待遠に御座あらうする間、なにぞ一曲仕りなくさめ申せとの御事にて候に、罷出て候が、なにと御座あらうする、やれ^{カサギ}一段の機嫌^{キゲン}に御合^{アヒ}タ、舞和歌常ノ如^{カサギ}有。

魔無原 八十四

へかやうに候者ハ、丹後国当社太明神に仕へ申末社の神にて候、寔に目出度御事にて候ぞ、当社明神と申ハ、日本第一天照御神なれハ、いきとしける者此御めくみを請ぬ者ハ御座なく候、去程に此所を魔無原と申子細ハ、仁王三十二代雄略天皇の御宇に、日本神国たりといへ共、当国にかぎり寔におそろしき魔国にて候、鬼神・どくちやう、くわのことくむらがり、すてに世の妨^{サマタケ}をなししかハ、くきやう・大臣此よし聞及ひ給ひ奏聞申され候へハ、御門此よしきこしめし、忝もまるこの親王急御退治あれとの御事にて候へハ、親王りんけんにまかせ、すてにうつたち給ふ處に、天台金の御札ふり下り候を、則取上ケ御覽しけれハ、神明天下り給ふとまなにて書付、此御山にふり下りしかハ、扱ハ神明の神力有とて、天道に向ひとくしん被成候へハ、忝も天照大神天降^{タマリ}給ひ、神道の大に御身を現し神力をそへ給

ひ、三とせ三月がその間に数万騎の鬼神共、残さずせめほろほし給ひ、日本神国一同の御国となし給しより此かた、魔無原とハ号給ふ、其後宮作り立納テ、今の末世に至る迄有難御事、申もおろかに御座候、誠に珍敷からぬ事なれ共、国土世界萬木千草に至る迄、此神の御神徳を受ぬ者ハ御座なく候、先是ハ此所におめて昔物語、去程に当今に仕へ御申有臣下殿只今此所へ御参詣被成候所に、神明嬉敷おほしめし、かりに顕れ出給ひ、大形神秘を御物語被成、先御帰被成タ、重而舞樂を双して御慰被成れうするとの御事にて候、其間只ハ何とて御座あらうするぞ、吾等ごときの末社にも罷出、一曲をも致なくさめ申せとの御事にて候に、是迄罷出テ候。へされハこそ是に御座ある、いそいで御礼申、一曲致さう。へ御礼申候、是ハ当社に仕へ申末社の神にて候、唯今御参詣を目出度存る、最前当社神明嬉敷思しめし、かりにまみえ当社の神秘を大形御語被成、かさねて舞樂を奏し、御なくさめあらうするとの御事にて候、其間御待遠に御座あらうする程に、我等ごときの末社にも罷出、一曲仕りなくさめ申せとの御事にて候に、是迄出て候が、なにぞ一曲致さうするか、但シなにと御座あらうするぞ。へ畏て候。へやれく嬉敷や、一段の御機嫌に申合タ、後ハ常ノ如。

△雨月 八十五

間、末社ノこしらへ、つあつき出ル、ワキ能ノ時末社舞有、つへつかす。

へ是ハ播州住吉の明神に仕へ申、門守の神にて候、寔に珍しからぬ事なれ共、国々に靈神数多地をしめて御座候中にも、当社住吉の明神は、異国のあひす追拂ひ、国家安全に守給ふ御事也、中にも和歌の道を専に守護し給ふに、西行法師当社へ御参詣候を、明神嬉しくおほしめし、枕の本に庵を結び、姥とおうぢと夫婦に現しおハします處に、ハや日も暮候程に、西行庵に立寄宿をかり申され候へハ、爰に姥とおうぢとあらそひを仕る、その子細ハ、おうちハ此庵の屋根をふくましい、月をみうすると申せは、姥ハいやく雨の音をきこうする間、屋根をふかうすると申シ、

式人がなかにふかう、ふくまひのあらそひにて候が、則哥の下の句御座候、その句ハ △賤がのきはをふきぞわづらふと、かやうに候、此上の句を御つぎあらハ、それを聞て御宿を参らすへきと仰候間、西行さあらハ付てみ候半とて、△月ハもれ雨ハたまれととにかくに、賤がのきはをふきぞわづらふ、明神殊外うれしくおほしめされ、おもしろの歌の心や、左有ハこなたへ御入候へとて、しやうじ入御申あり、通夜歌^{ヨモスカラ}の極意共御物語被成候程に、ハや夜もあけかたに西行も少まゝとろミ給ひ、目覺て当を御覽^みつれハ、かの夫婦の人もみえず、ありし庵もなく、神木の杵^{きね}の下に御座ある程に、西行殊外きもをつふし、不審半成程に、吾等こときの門守の神にも罷出、右の子細を西行につけしらせよとの勅を請、只今西行の御前へ参るがどこもとに御座有ぞ。へされハこそ是に御座あるよ、頓て神勅の通申さハやと存る。へいかに西行へ申候、是ハ当社に仕へ申門守の神にて候、只今是へ出る事余の義にあらず、お宿を参らせられたるおうぢと姥ハ忝も住吉明神なり、御身唱歌の友人なれハ、かくちぐうをなし、哥の極意を御物語なされんために、お宿を参らせられて候へ共、ハや夜も明方になり候へハ、未少仰られたき事を仰のこさせられたる間、罷出す、め申せ、仰のこされたる哥の事を只今宮人に乗移おほせ渡さるべきとの御事なり、よくく心靜に御聞被成候へ、是ハ慥に神勅をうけ申わたし候ぞ、是へ参る宮人ハ正眞の御託宣にて有へし、疑ひなく御聞あれ、かまひてその分意得候へく。

錦戸 八十六

シテへ是ハいかな事、にかくしる事哉、外方がないよ。あとへやいく何事ぞく。へ扱ハお主ハ子細を知て出たるか、様躰ハしらぬか。へいやなに共子細ハ知ね共、お主がきもをつuite出たというほとに、何事成共お主が後をくろめうとおもふて出たよ。へ扱もその心掛ハ満足をした、さらハ子細を語てきかせう、先心をしづめてきかしめ、頼朝・義経御中たがはれた事ハ四方に隠れがないに仍て、判官殿ハ秀平を御頼被成、此所へ御下向にて候間、秀平の

御馳走中、心にも言葉にも及ハぬ程かつごう申され候處に、秀平俄に御煩つき被成、今をかきりとみえさせ給ひ候折節、御子息達を悉く秀平御前へめされ、御遺言に義経の御事ハ我、を御頼あり是迄御下向被成候間、吾等たのまれ申上ハ、自然鎌倉殿を討手向ふ共、心をひとつにして防戦、五年にも拾年にも及ひなハ、御兄弟の御中終にハなをさせたまふべき、其義にてあるならハ秀平が子々孫々に至る迄義経の御影を以テ樂々とそたつへし、かまひて、義経をよきにうやまい申せとて、堅御遺言有て後空敷ならせられたるといふが、是頼母敷事じや、あど、シカク言。へ扱それについての言事しや、鎌倉殿よりもぶりやくの印判を被成て、錦戸の太郎殿へ御行書下された處に、はや義経此由きこしめしけるか、太郎殿日々出仕めされけれ共、判官殿さらに御對面なされず候間、太郎殿殊外ふきやうあつて、御行書ハ下さる、左有ハ此事おもひ立へしとて、太郎殿ハ和泉の三郎殿へ御出有テ、此よしかくと仰候へハ、三郎殿ハ秀平殿の御遺言に堅御申候程に、覚悟に及ハぬ叛謀におゐてハ、中、同心致すまいと仰されたる間、太郎殿の御機嫌悪敷成て其儘御たち被成た、三郎殿のかたい事、人間の中にハあるまひとの、みな、仰らる、事しや。へあどシカ。へ扱太郎殿ハ時刻移てかなふまいとあつて、太郎殿へまふせいをもつて押よせ、三郎殿を討とらんとの事なれハ、一方にハ此度一指致さうと言てハや具足をきる者もあり、櫓をしめてしんどうする者もあり、こてをとりてすねあてにし、すねあてを取てこてにし、腹巻をおとかいにしうろたえ、寔にやくたいもなき躰にて有が、いづれかやうの折ふし、何方へ成共大勢ひつくみかせいに參、覺をとらふと存て先是迄出たるが、かたがたハなにとおもふぞ。へいや、某ハお主が出たるによつてこそ是迄參たれ、どう成共お主がなるやうにならふまでよ。へそれハ近比しや、その分か。へお、その分しやが、先お主ハなにとおもふぞ。へぎりのかたいお方しや程に、かちになつた事ならハくわつと知行を下されう程に、和泉の三郎殿へ參らうとおもふハいかに。へあ、そなたハ無分別な人しや、太郎殿ハまうせいなり、三郎殿ハ只一人、その上某ハ太郎殿の御領分にある程に、是迄ハそなたと一所に致さうと存知た

が、お主ハ太郎殿ひいきしやとみえた、三郎殿へいかしめ、某ハ太郎殿へ是合すぐに行ぞく。へやいくそな物、先まていはいく、先談合せうぞ。へいや今度道断の事、申さうやうもおりない、みともへ忠説のやうに申程に、寔かと存て萬事を語たれハ、語られすまいておゐて、そちハ三郎殿ひいきしや、我等ハ太郎殿へ行と言捨て、そのま、はいつた、物毎に油断致せハ人に目ぐる、と申が寔にて候、なにと仕てよう御座らうぞ、端と行当て御座る、いやく我も人も身持が肝要しや、太郎殿の勝に成るハ定の事、某も太郎殿へ参らうする、いそけく。

大江山 八十七

へ御前に候。へ畏て候。へ扱もく迷惑なことを仰付られた、鬼の有所への先かけハこわひ事しや、去ながら参らすば御折檻にあハふする程に参、おくの躰をみて参らハやと存る。へされハこそ鬼が女に化タ、あらふしきや、あの女ハみたやう成、不思議な事しや、されハこそ扱くお主ハ何としてきたぞ。女へその方ハなにとしてきたぞ。へたのふた人の御供をしてきたハ。へ扱々笑止な所へおりやつた、其方の命もあるまいぞ、シカく。へ其事で御座ある、あの女は某の存たる物で御座有によつて、詞をかけて御座有。へ中くの事、よう存知て御座有。女へその事にて候、酒天童子にとらハれす、ぎを致て参らするが、我等も帰たう存れ共、おかへしなふて迷惑致ス。へ暫御待候へ、だうじにそのよし申さう。女へいかにだうじの御座候か、とうく御出候へや。女へ客僧達の数多御出有て、一夜の宿と仰られ候。女へ心得申候。女へ客僧達の御座候か。女へそのよし申て候へハ、お宿を参らせよとの御事にて候、こうく御通候へ。女へお客僧達へ申候、ふしき成所へ御出あり、只今の如ク童子に九献を御しる被成候故、たうしも機嫌能御寝なりて候。女へ扱ハさやうのためにて候か、たうしの聞ハ我等のよく存して候、是合遥あなたに大成岩屋の内に、大木・小木・大ばんじやくを取かさね、かんくつの中に御座候、然共聞のかぎハ某の預りて候間、御心〔虫損〕おほしめめされ候へ。へ最前の女房衆おりやるか。へ最前申たるかぎ頼光様へおわたしやつたか。女へ中く参らせて候。

へ酒天童子ハ殊外用心めさるゝとの。女へあのやう成用心めさるゝ事ハおりのない。へのふ酒天童子をたいらけ給ふ事ハ一定なり、御ほうびハらくくとする程進せられうほとに、目出たい事でハないか。へそれハかたしけない事でありやります。へもハや某も用の事ハないほとに、都へつれ立てゆかふ。へわらハもかやうの嬉しい事ハおりやらしまさぬ、いさお供して都へのほらう、のふ、あれ人の小共ハ成人してすハ。へ左様でおりやらしまさう、久しうみぬ程に子共がみわすれう、お主の男もまつほとこそまたうすれ、帰る事はあるまひといふて、みめのよい妻をみつて、子共わきへなつてすハ。

元服曾我 八十八

へ御前に候。へ畏て候。へいかに申候。能力へ案内とハたれにてわたり候ぞ。へ何と助成の御見舞と仰候か。へそのよし申候べし、暫それに御まち候へ。へいかに申上候、助成の御登山にて候。へ中くの事。へ畏て候。へ是に候、そのよし申候へハ、此方へ御出候へ、御目にかゝらうすると申され候。へ意得申候、そのよし申て候へハ、此方へ御通あれとの御事にて候。へ御前に候。へ畏て候、ハやばつくんに御出あらうする物を。へいや是に渡り候、いかに申候、【虫損】当是迄御出にて候、【畏】て候。へこなたへと仰られ候。

〔奥書〕

間数八拾八番

【西村弥三左衛門】

五冊之内

付 記

西村本『問之本』の翻刻を許可いただいた、筑波大学附属図書館に心より感謝致します。また、梶山女学園大学より、平成五年度の学園研究費助成を頂きました。本稿はその成果の一部となります。なお、パソコンへのデータ入力には、日本福祉大学社会福祉学部学生の平沢真哉君の協力を得ました。記して感謝申し上げます。